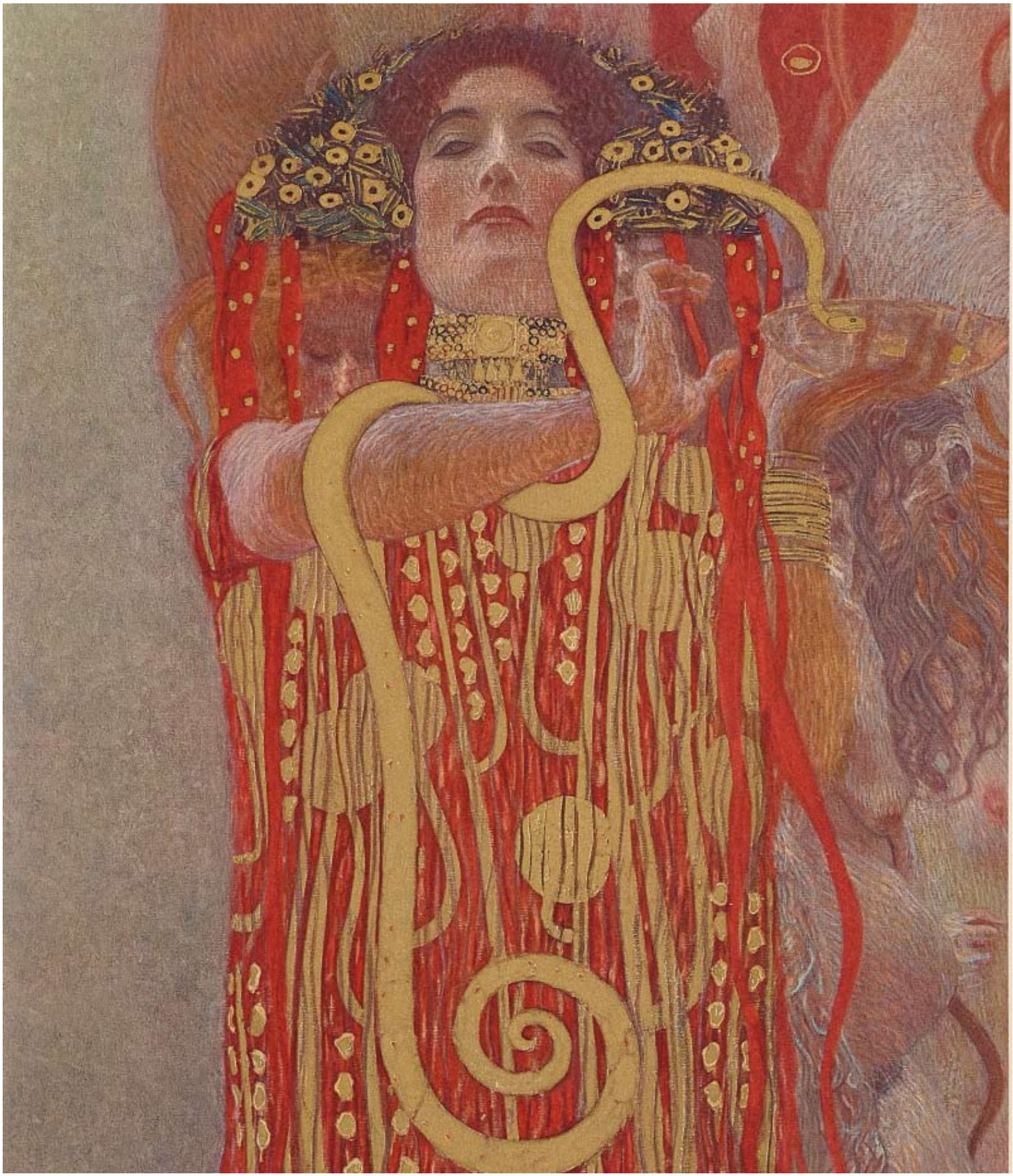
GEKKAN-WIEN September 2025 令和７年９月号 Nr. 425　平成元年創刊　gegründet 1989

月刊 ウィーン
GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 38 年目　Nr. 425
2025年9月号

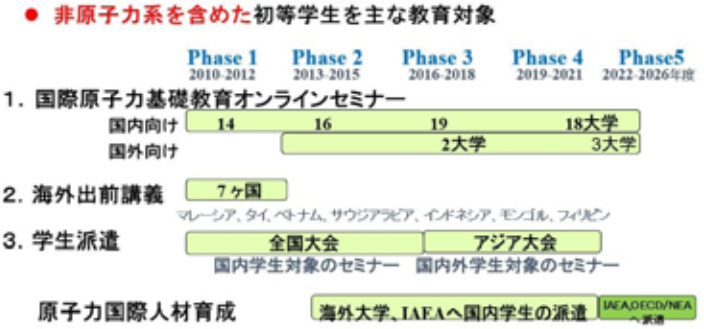


Gustav Klimt, Hygieia ― Detail aus dem Fakultätsbild Die Medizin, 1900―1907
Farblichtdruck aus der Mappe Gustav Klimt. Eine Nachlese,　hrsg. von Max Eisler, Druck und Verlag der Österreichischen Staatsdruckerei, Wien, 1931　© Klimt-Foundation, Wien

杉本純の 原子力の話 II ウィーンと京都 158

東京科学大学（旧東京工業大学）ゼロカーボンエネルギー研究所では、原子力基礎教育の充実を目指して、原子力教育研究に携わる国内外の大学を連携させた連合体（大学連合）を形成し、二〇一〇年度より文部科学省の補助金を得て、非原子力分野の学生を含めた初等学生を対象に、国内外向けオンラインセミナーと原子力機関への学生派遣を中心とした人材育成事業を代表校として展開している。

本事業への参加大学は、国内は茨城大学、大阪大学、大阪産業大学、岡山大学、金沢大学、近畿大学、九州大学、京都大学、東海大学、東京科学大学、早稲田大学、名古屋大学、八戸工業大学、福井大学、北海道大学、山梨大学、長岡技術科学大学、東京都市大学（一八大学）。国外はマレーシア国民大学（マレーシア）、チュラロンコン大学、カセサート大学（タイ）（三大学）。協力機関は、日本原子力研究開発機構、日本原子力産業協会、若狭湾エネルギー研究センター、メーカーを始め八機関等が参加している。



オンラインセミナーは、当初は国内外拠点を繋ぐビデオ多地点接続装置を経由して各大学の教室で行われたが、二〇二〇年からは新型コロナ対策としてＺｏｏｍを利用して、学生が各自のパソコンで受講できる。大学や協力機関から人選された講師の豊富な知識と経験に裏打ちされた講義は専門家が聴講しても十分に聞き応えがある。全国どこからも学生は講師とリアルタイムで議論できる。二〇二三年度までに国内三三回、国外三五回のセミナーを開催し、総延べ参加数は四、三一〇人に達している。

学生派遣の全国大会は、原子力現場の見学、専門家の講義、討論を含む一週間の合宿セミナー。二〇一六年度から開始したアジア大会は、わが国とアジアを対象とした同様のセミナー。日本人学生とアジア学生がほぼ半々になるようにし、原子力施設の見学や専門家との対話を通じて現実の原子力を学ぶと同時に、講義、見学、討論、発表はすべて英語で行うことで日本人学生の国際感覚やコミュニケーション能力を養成する。外国人学生には、わが国の先進的な原子力技術に接する機会を提供してきた。二〇二一年度までに、全国大会は八八名、アジア大会では国内から一九名、国外から一一名の参加があった。

原子力国際人材育成では、優れた国際感覚、高いコミュニケーション能力や情報発信能力を有し、国際社会で活躍できる原子力国際人材育成のため、国際原子力機関（ＩＡＥＡ）、経済協力開発機構／原子力機関（ＯＥＣＤ／ＮＥＡ）や海外大学に日本人学生を派遣している。二〇一三年度から二〇二四年度までにＩＡＥＡへ一九名、ＯＥＣＤ／ＮＥＡに一名、海外の大学等に一九名の学生を派遣した。現在は原子力国際人材育成として海外学生派遣を主軸とした活動として展開しているが、近年、わが国のエネルギー安全保障の脆弱性を背景に、原子力人材育成の重要性が強く認識されていることから、本事業の充実・強化が今後の課題と考える。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の夏のイベントを紹介したい。ウィーンでは、七月から八月末まで市庁舎前広場で「フィルムフェスティバル」が開催される。市庁舎を背にした大きなスクリーン上に、クラシック音楽やオペラ、バレエ、さらにはジャズや現代音楽まで、幅広い映像作品が毎晩上映される。入場は無料で、誰でも気軽に世界的な舞台の記録映像を楽しめるのが魅力である。しかも広場には多国籍の屋台が軒を連ね、オーストリア料理のみならず、アジア、中東、南米といった世界各地の味覚が並ぶ。観光客も市民も、冷たい飲み物を片手に夏の夜風を受けながら音楽映像を鑑賞する光景は、まさに芸術の都ウィーンらしい「文化の広場」といえよう。

一方、京都の夏を代表する行事といえば、八月一六日に行われる「五山送り火」である。古都を囲む山々に「大」「妙法」「船形」「左大文字」「鳥居形」の火文字が順に灯され、夜空を赤々と染める光景は圧巻である。これは盂蘭盆の精霊送りとして室町時代には既に記録があり、先祖の霊をあの世へ送り返す宗教的な行事であるとともに、京都の人々にとっては夏の終わりを告げる風物詩である。鴨川の河原や市街の高楼から見上げるその瞬間、古来の祈りと現代の暮らしが重なり合い、京都ならではの歴史と伝統が都市の風景に息づいていることを実感させる。ウィーンでは音楽と食の広場に、京都では火と祈りの夜空に、人々は夏の記憶を刻むことに改めて深い感慨を覚える。

余談であるが、筆者は二〇一一年～二〇一六年まで、大学連合の京大での窓口を務めた。二〇一六～二〇一八年まで東工大で別のプロジェクトを担当したが、大学連合事務局と同じ居室にいた。本年四月より大学連合事務局を担当するのは縁があったと思う。フィルムフェスティバルも五山送り火も心より楽しんだ。今月も両市の夏のイベントを紹介することができた幸運に感謝しつつ、フィルムフェスティバルのスケッチを掲載させていただく。

■杉本純　東京科学大学特任教授
元京都大学教授